



量より質より関係性

量より質の時代から、質より関係性の時代が到来しているのではないだろうか。

類似した商品が溢れ、バーチャルの発達により、炫耀しきれないほどの情報が入ってくる。その結果、商品や企業の情報を見逃さない、処理できないといった人が多くなっている。このような時代に消費を決定するのは「関係性」なのではないだろうか。それは個人的な関係性、距離的な関係性、時間的な関係性である。

都市には様々なタグが存在しているにも関わらず、ソリッドな建築形態により、これらの関係性を制限してしまっている。また空間の階層性は顕著になり、この境界を目立たなくすることはできない。空間、タグの構造の解体により、目的がなくても、偶発的に関係が生まれるような建築が都市のポテンシャルを引き出し、活かすことができるのではないだろうか。

上下へのいざないと偶然性の創出

同じレベルにあるのに、水平導線がつながっていない。

一度縦導線を経由して他階の水平スラブを渡りまた縦導線を利用してアクセスする。

このような不便性から、各場所の距離的な優劣がいまになっていくと考える。

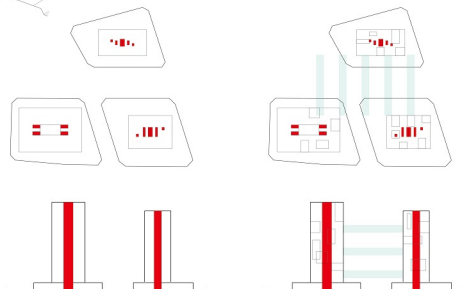
これにより、人間の習慣や便利から使う場所がより習慣化しにくくなり、様々な場所へ足が向きやすくなる。

複雑に組み合った路地のような空間を歩いているときに、吹き抜けから他の場所での活動を見る。

そこに行こうと思うと縦導線に乗らないとどう着かない。

通っているうちに新たな場所を見つけていく。

全体構成ダイアグラム



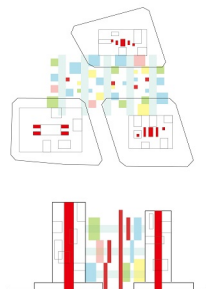
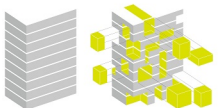
ソリッドなビルとそれを貫く縦導線
現代の都市のコア、建築のコアの象徴である。

ソリッドなビルを解体し、ボラスなものにしていく。
導線が水平、垂直に広がっていく。

ソリッドからボラスへ

現代の建築のラングとは、ソリッドな建築のビルディングタイプである。また、その中を単純な小空間の連結に定量化される。これらが空洞、EV、その他のコアとなる近代的設備により合理的に組み上げられ、ガラスのスキンで覆われたもの、これが現代の都市を覆いつくすブリックボックスである。この中の行為は何も見えず、小空間の間に影響はない。

ボラスの可能性：ソリッドに解し、ボラスな形状は出ない、断面、選択性が高まり、ソリッドを解し、各空間の多様性を生み出す可能性を持つ。



導線の復旧によりはき出された空間や、新たな空間が、縦導線に沿うように並ぶ。
縦導線は分断された立体的に配置され、縦導線同士をつなぐスラブは空中の地面のようなものになる。

道・建築・タグの脱構築

都市を構成する主要素、道と建築。この二者は明確に棲み分けされている。

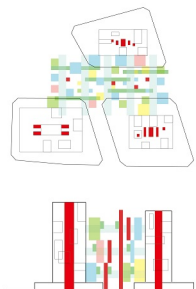
道と空間が明確に分断されている不連続な状況において人が無目的でその境界を超えることは少ない。目的をもって初めてその境界を超える。

この不連続な空間の中で目的を持たせるために、空間の内部を外に拡張する。それがタグである。このタグには主要内容やその方法が示される。

そして、このタグが集積することで、さらに境界性を高めている。すなわち、空間の性質の差を顕示しているのだ。

これらの境界を取り払い、タグを後退させることで、不連続な連続にする。

後退したタグは、移動を分析するような境界を作らず、また、空間の性質の差を顕示せず、移動を促すような本来の主張へと還元される。



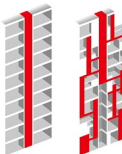
さらに水平動線を垂直方向の水平動線とつなぐ。
これにより垂直動線がより3次元的につながり、建築全体を立体的にとらえるきっかけになる。
宙に連なる小空間とそれをつなぐ導線は、互いに干渉し合い、さまざまなレイヤを併った様々な空間となる。

縦導線、巨大EVの解体

大型ビルの中核にそびえる巨大エレベーターはビルの機能空間を使う上での要になるが、都市を平面的にとらえる要因になっている。立体的な都市だが、都市の移動を支える階層では、上階層もビルの足元一点に定量化される。

この縦導線、巨大EVは多くの人を上層へと運ぶ巨大な力を持つ。

これを計画要素として利用し、動的不均衡を目指す。縦断のEVを分散し、EVをつなげるネットワークを動的に作ることで、縦導線の足元が立体的になるように、そして発見の可能性が3次元的に広がる導線空間を考える。



さらに部分的にガラスで開くことで、さらに上下左右方向につながりを持つ。また一つの動線を辿っているときに、屋内、半屋外、屋外と、都市を感じる空気感の変化もレイヤで構築するようにする。



ラングとパロール

ソシュールは、言語 (language ランゲージ) には、ラング (langue) とパロール (parole) という二つの側面があると考えた。ラングとは、ある言語社会の構成員が共有する音声・語彙・文法の規則の総体、すなわち記号体系である。それに対して、パロールは、ラングが具体的に個人によって使用された実体である。

建築におけるラングとは、現在無数に立つソリッドなプロトタイプビルディング。パロールは、これらの中に収容された用途・機能。

このパロールの在り方の変化から、ラングも変化していくことが求められる。



パロールとエクリチュール

哲学者ジャック・デリダはパロール（音声言語）とエクリチュール（文字言語）の関係について脱構築により論じた。

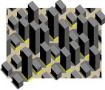
西欧哲学においてエクリチュールはパロールの補助的存在として捉えられており、階層的な二項対立の構造が存在していた。しかし、この階層的二項対立の構造に限界がきて矛盾が生じているという。エクリチュールがパロールの補助的役割からはみだし、言語を包括する存在になるというのだ。それを示し、この構造を解体したのち、今までのパロールとエクリチュールに対して新たな結びつきを示唆した。

建築のパロールとエクリチュールはこれと同じ構造を示す。

ここで、パロールは機能・用途、エクリチュールはこれを顧みずもの、すなわちタグである。これは機能の補助的なものであった。しかしこの構造には限界がきている。建築におけるエクリチュールがパロールを表すだけの補助的なものではなく、建築を包括する存在になるのだ。

多様性、情報化社会が叫ばれる現代において、空間の用途・機能よりもそのタグの存在が重要視される状態にある。

その結果、エクリチュールはパロールを表すだけの補助的なものではなく、パロールの質を左右する重要な要素となる。このエクリチュールをタグとして捉えなおし、タグが折り重なることによって空間の質の多様性が許容される建築の構成を捉える。



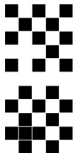
現代の人と都市・建築の捉え方

人は単体の各個人ではなく、群集の中のある一人。

地盤面があるき、垂直動線に乗り、目的地としてのボックスに吸い込まれる。目的地までの移動の中は目的地はない。

不連続な建築に対し、道と建築という明確な棲み分けを施し、双方とも基礎として促えることで人々の
 器用に、そして自らを洗滌してこれに棲みついていった。その結果出来上がったのが今日の窮屈な都
 である。この中に人は軟禁され、單調な生活を送っている。

ここには他者、異業者との距離感こそそもそも存在せず、関係していても関係性がなく、遠くにいても魔になる。また基盤としての空間に人々は納められ、そこではボックスの大きさがすべてである。プログラムに見合ったボックスの大きさが選択され、利用されていく。



ワーカーからプレイヤーへ

効率主義のうちに定常化されてきた集団は平均的なnさんとして扱われる人の集合であった。

しかし、多様性、異種混合が叫ばれる現代の社会構造においては、集団ではなく、個人の力が注目される。また、個人の持つ特色の多さが集団の成員のカギとなる。人は、ワーカーからプレイヤーへと変化しているのだ。

この結果、ノマドワーカーやサテライトオフィス、シェアオフィス、ラボ、サロンなど、新たな空間の
間が誕生した。すなわち、一つの集団で固まる従来の大空間が細分化され、さまざまなタグに貼れた
様々な小空間の点にへと変化しているのだ。

これらの変化に対し、過去の効率主義のうちにできたソリッドで均質な建築形態としてのラングは適合しなくなっているのではないだろうか。

敷地：大阪梅田 ダイヤモンド地区

四ッ橋筋、御堂筋、豊根崎通に囲まれた五角形の敷地。

戦前から区画整理が始まり、1953年には当時日本一の高層建築「第一生命ビル」が竣工。2007-2013年、大阪府内地価最高地点だったが、2014年、グランフロント大阪に抜かれた。

南側、現在第一、二、三ビルの建つ敷地は木造低層建物が密集し、不法占拠が長期的に行われ、戦後の闇市へとつながった。

1970 年第一ビル、1976 年第二ビル、1979 年第三ビルと開発がおこなわれ、現在に至る。





office cafe

office

goods

drink

office

kitchen

office

shop

office

shop

shop

office

drink

books

back

office

commercial

office

office

back

hall L

back

rest

pub

pub

office

南向きのテラスで
日向ぼっこしながら
本を読もう

たくさんのブランドが集まるエリア
いろんなアイデアを求める仕事を
しやすいoffice

大型事務機械、作業スペース
ここへこれば作業ができる
作業しながら打ち合わせも

突き当りの大きなHall
用途は様々
道の奥を見えなくする仕掛け

飲食店が集まる場所
上層階に行く前にここを通過して、今日の
メニューを確認

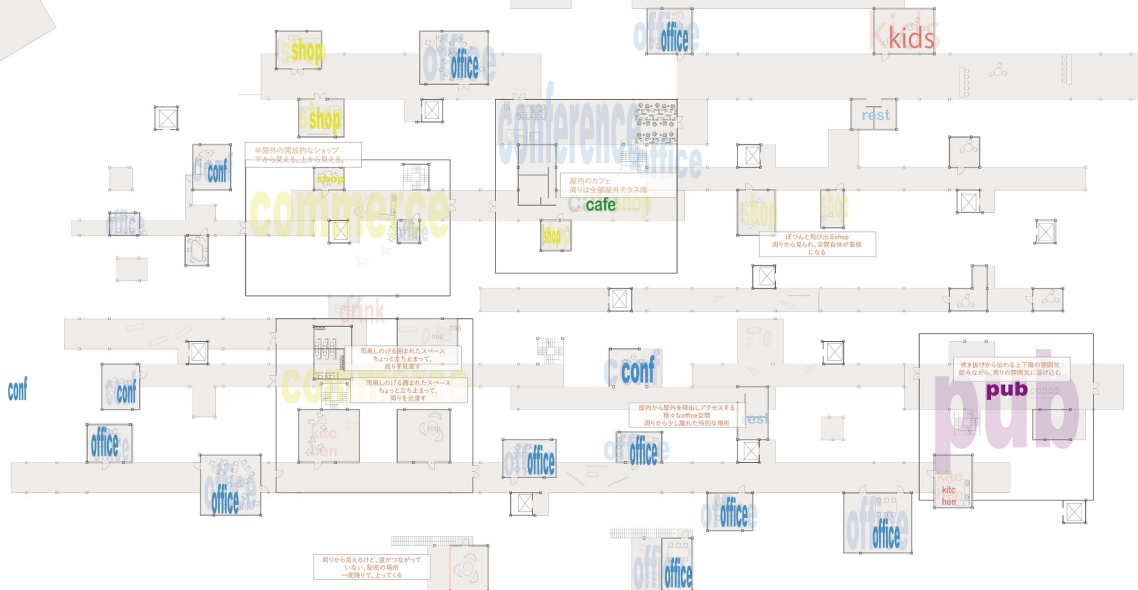
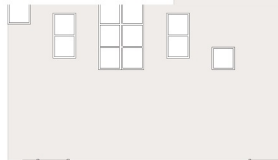
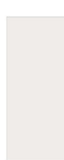
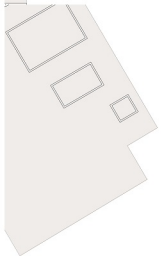
EV降りたら賑わいがある。
奥へ進むと今日の会議室
賑わいの中で、楽しくできそう

囲まれた貸し会議室
周りにはフリーな会議室
同じ空間にいる人々と使い方

飲食店に開いた会議室
お酒を飲みながらアイデアを出すなら
ここが一番

plan 5F S=1:200 N





登った先に、都市を見渡す展望台
外気を感じ、新たな都市を肌で感じる

上下左右に抜ける視線
様々なタグが集まる、建築の新たなコア

仕事に疲れたら屋外ガラスへ
自然と人が集まる憩いの場所

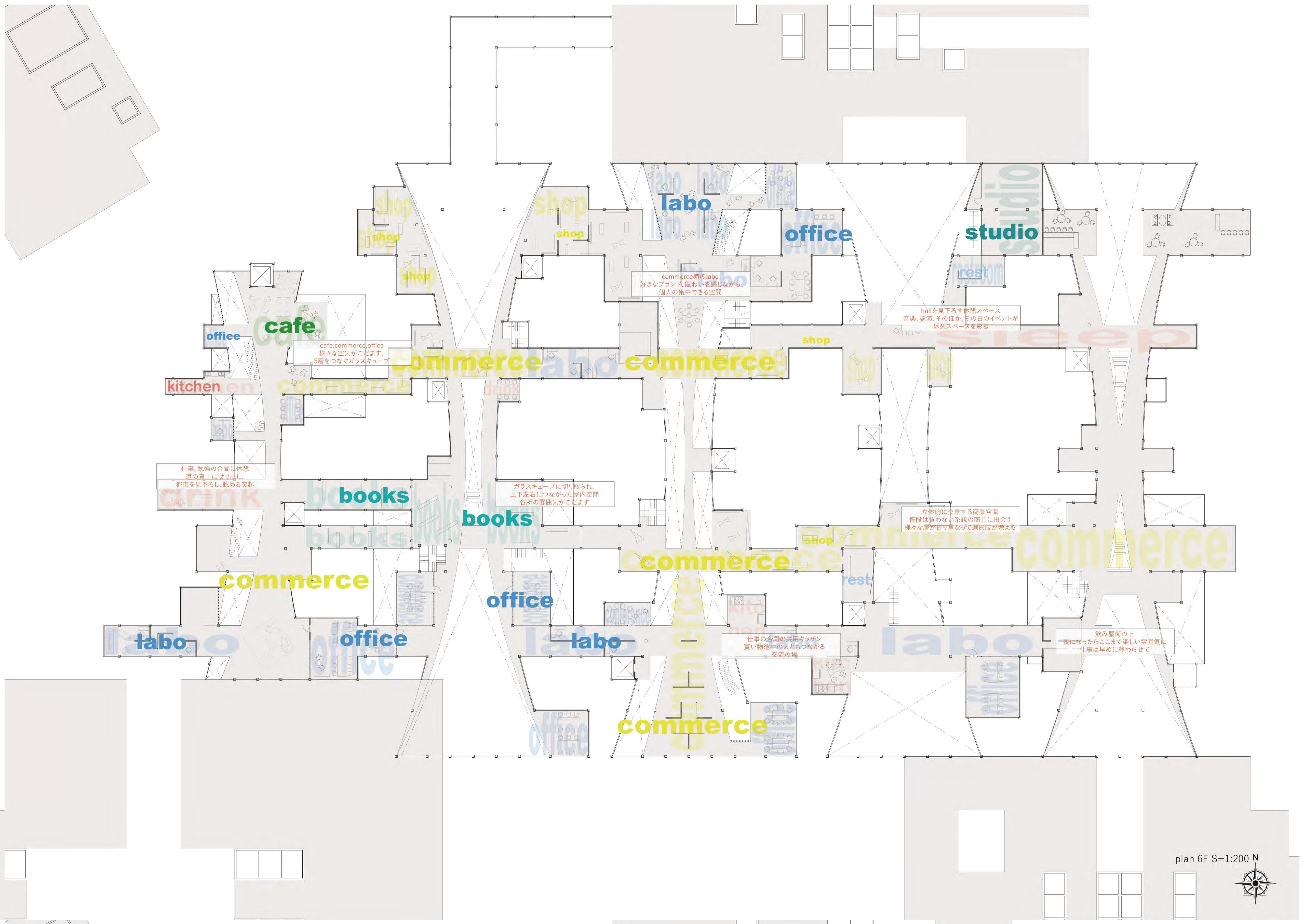
オフィス空間と商業空間が、立体的に
連続的につながる吹き抜け

商業空間のタグが
他の空間に彩を与える

空間を大きく囲むガラスウォールが
上下方向にも空気感を伝える

EVの乗り継ぎスラブ
空中の地面となり、上下移動を多様にする

屋内空間の人々があふれ出す屋上
ガラスな外部空間に賑わいがあふれる



仕事、勉強の合間に休憩
道の真上にせり出し、
都市を見下ろし、眺める突起

cafe,commerce,office
様々な空気がこたます、
5層をつなぐガラスキューブ

ガラスキューブに切り取られ、
上下左右につながった屋内空間
各所の雰囲気がかかります

commerce横のlabo
好きなブランド、賑わいを感じながら
個人の集中できる空間

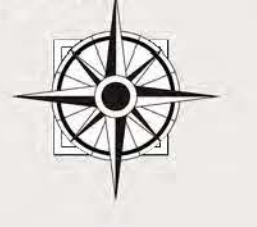
hallを見下ろす休憩スペース
音楽、講演、そのほか、その日のイベントが
休憩スペースを彩る

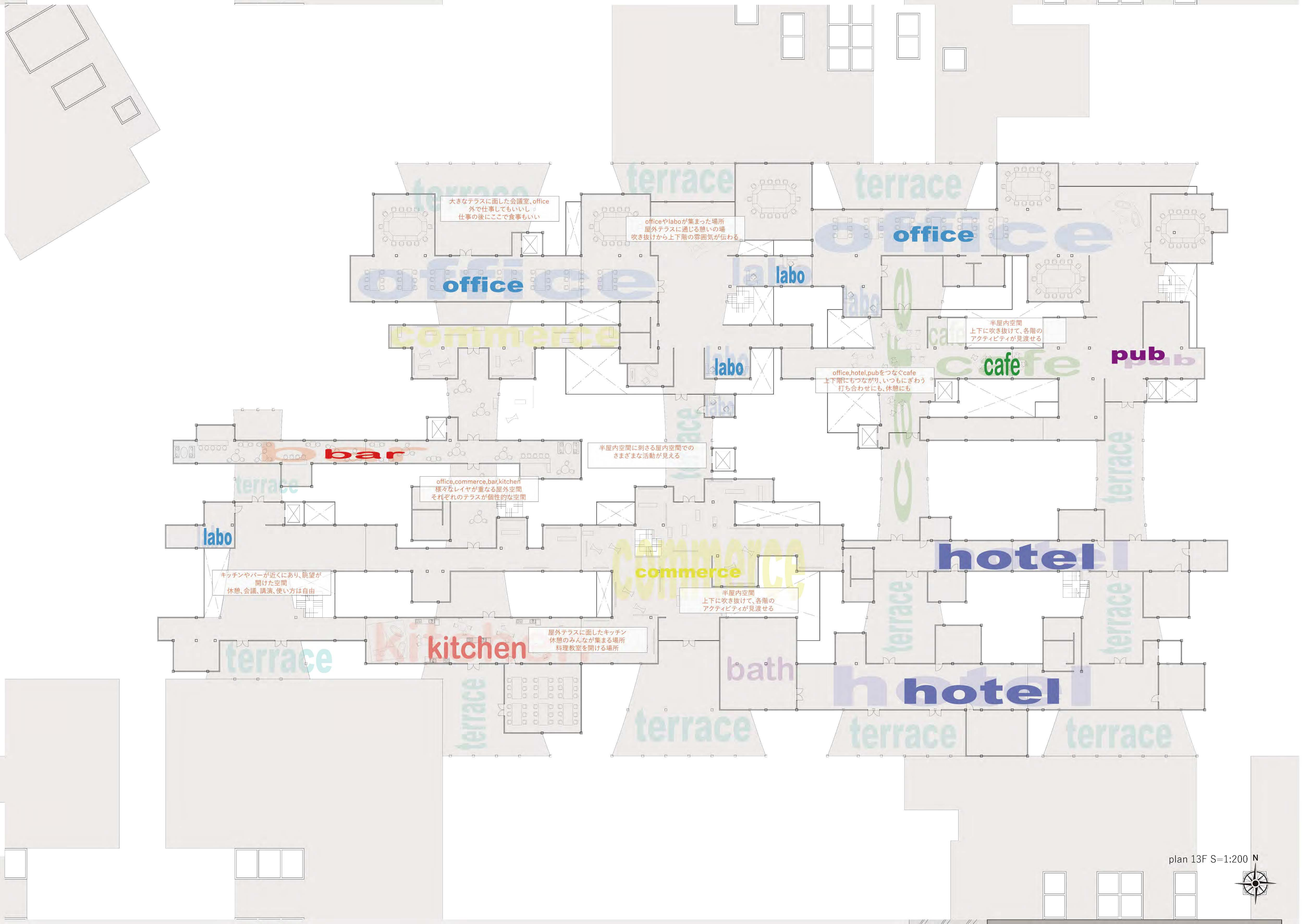
立体的に交差する商業空間
普段は買わない系統の商品に出会う
様々な層が折り重なって選択肢が増える

仕事の合間の共用キッチン
買い物途中の人ともつながる
交流の場

飲み屋街の上
夜になったらここまで楽しい雰囲気
仕事は早めに終わらせて

plan 6F S=1:200 N





大きなテラスに面した会議室、office
外で仕事してもいいし
仕事の後にここで食事もいい

officeやlaboが集まった場所
屋外テラスに通じる憩いの場
吹き抜けから上下階の雰囲気伝わる

半屋内空間
上下に吹き抜けて、各階の
アクティビティが見渡せる

office, hotel, pubをつなぐcafe
上下階にもつながり、いつもにぎわう
打ち合わせにも、休憩にも

半屋内空間に刺さる屋内空間での
さまざまな活動が見える

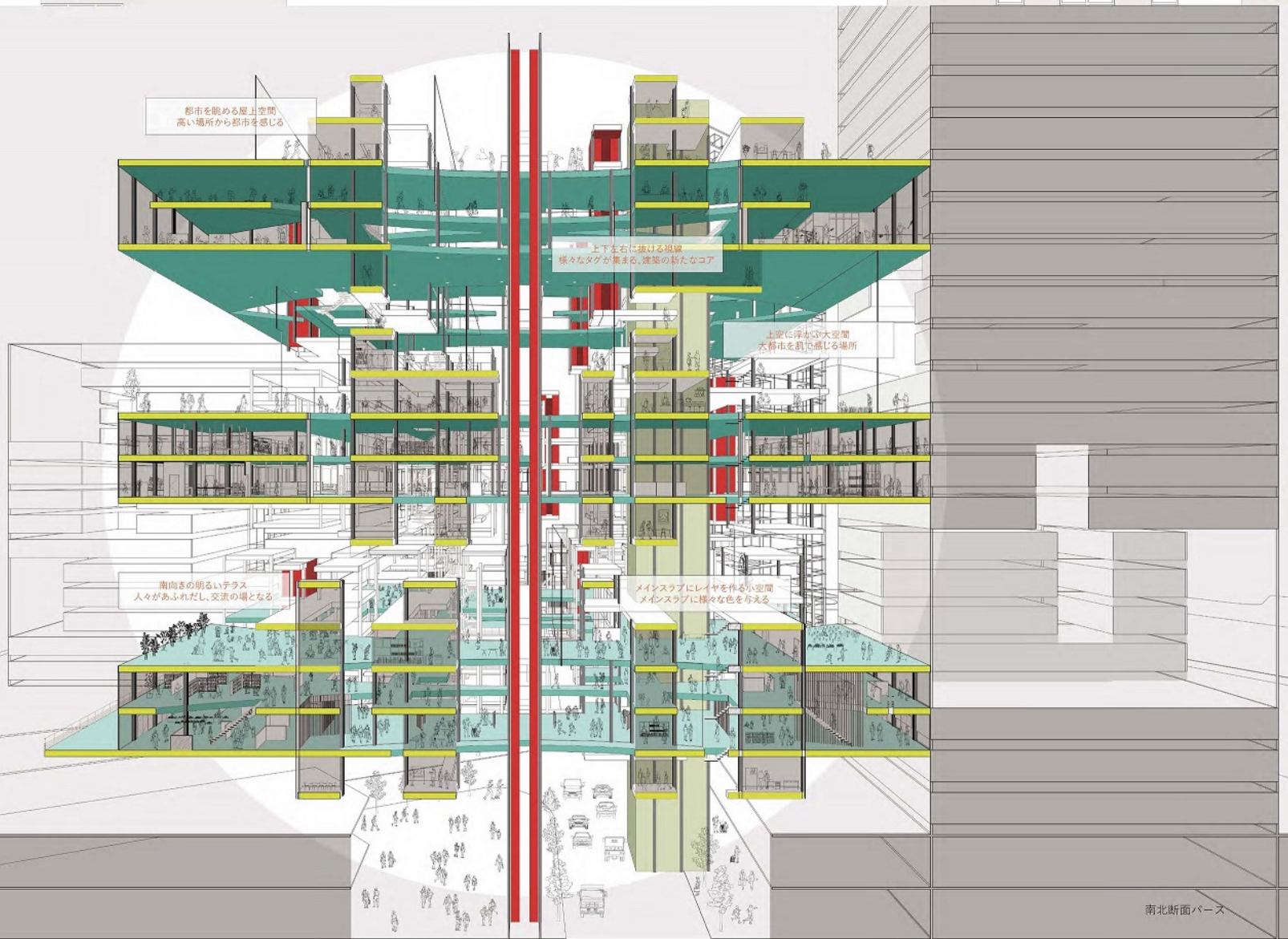
office, commerce, bar, kitchen
様々なレイヤが重なる屋外空間
それぞれのテラスが個性的な空間

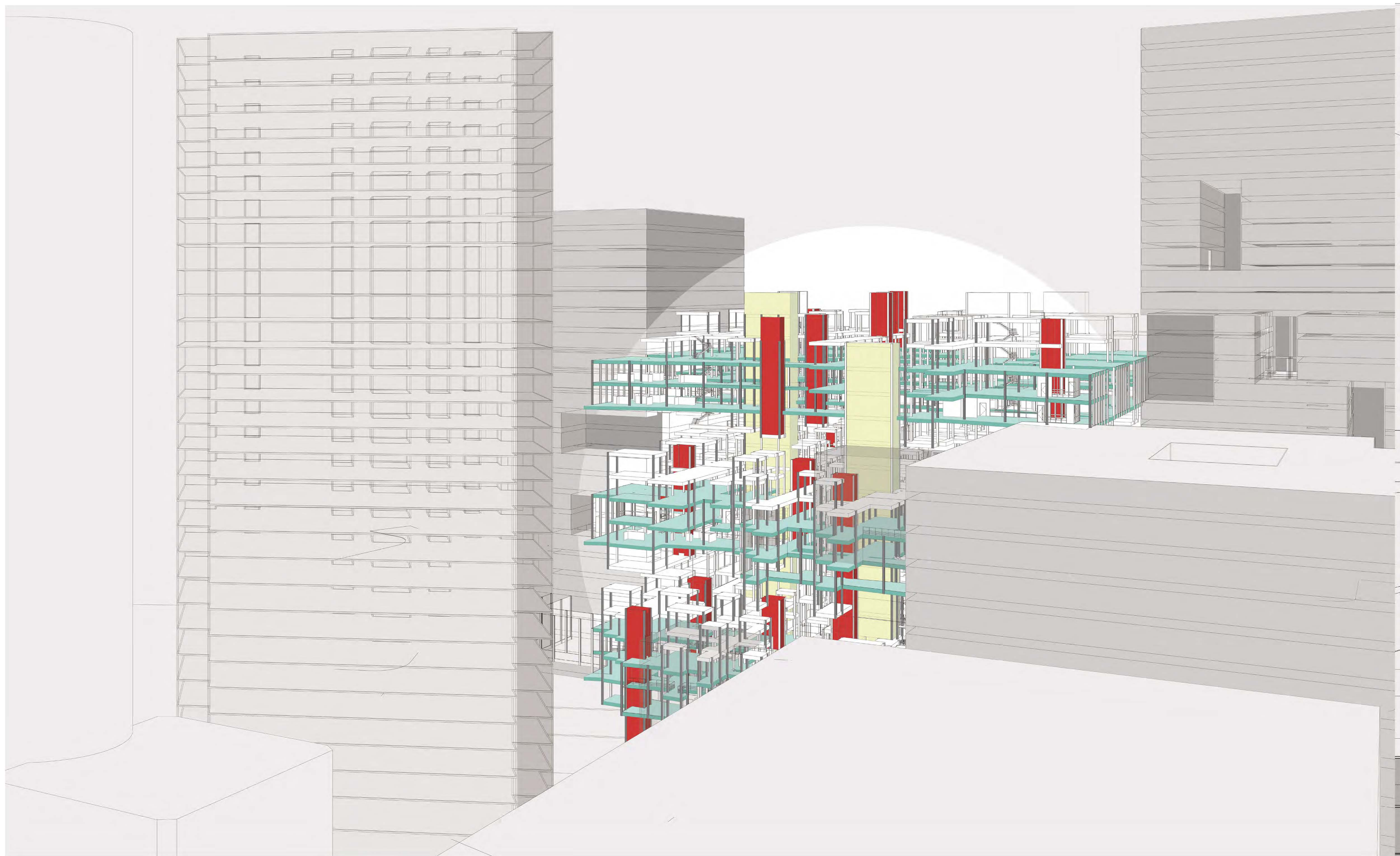
キッチンやバーが近くにあり、眺望が
開けた空間
休憩、会議、講演、使い方は自由

屋外テラスに面したキッチン
休憩のみんなが集まる場所
料理教室を開ける場所

半屋内空間
上下に吹き抜けて、各階の
アクティビティが見渡せる







ラングとパロール

